

# せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成29年12月 第202号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

## 今や『世の光』は不要に成ったのか？

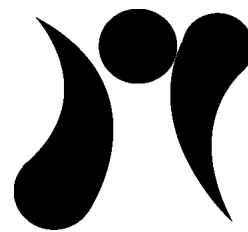
かつて糸賀一雄氏は、何事に対しても懸命にベストを尽くす重症心身障碍児たちが『世を照らす光』に成り得る存在である事を広く社会に示し、『この子らを世の光に』と言われました。

多様に柔軟に変化し得る『持続可能な社会』を創る為には、社会活動や生産活動に直接従事できない「老いた人や先天的な障碍児」も、社会にとっては『貴重で必要な存在』である事を、人類の長い歴史が証明して来ました。「優性思想」や「排除の論理」がはびこる社会や組織は硬直化し易く、長くはその活力を維持できないのです。二十万人以上もの障碍者を社会から抹殺した「ナチス・ドイツ」は更にその後、数百万人のユダヤ人を虐殺し、近隣諸国に戦争を仕掛けた上で、短期間で滅びました。

数ある動物の中で人間のみが「老いて逝く営み」を「集団の中」で他者に委ねて、人生を終えます。老いて生産活動や社会活動に直接参加できなくなった身の「全て」を委ねて、遺伝子では伝わらない『人間の社会性』を引継ぐ為の『何か』を次の世代に伝えて、『社会的使命』を果たすのです。

人を取り巻く「自然界も社会」も、絶えず、大きく、変化します。忘れた頃に大きな自然災害が起き、人と人が戦争を繰り返します。其れでも人は、社会を引き継ぎ、連綿と歴史を続けて来ました。単なる「群」ではなく、多様に变化する『社会』を構成して生きる為には、人は、「思想や宗教」を創り、「人間性や社会性」を養い、構成員として守るべき「ルールやマナー・モラル」を構築します。其れは「遺伝子」で引継げるものではなく、「老いて逝く身に起きる変化」を委ねて次の世代が創る『思想や社会性の礎』と成り、連綿と引き継いできたのです。要介護になり認知症になって委ねる「老いの暮らし」は、『老いの身が備える社会性』を伝える『社会的に重要な意味と役割』を持つ価値ある営みであり、『予防や抵抗の対象』でも『迷惑』でもないのです。

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

「老いも認知症も予防したい」という願望は個人的に「真実」ではあっても、現実には『予防し切る方法』は無く、思い通りに「予防し切る人」も居らず、抵抗しても「少し先延ばし」できる程度でしかありません。「個人的願望」に対しては、行政が「側面的」に支援はしても、『社会施策』として「予防と健康」を全国民に求めるのは、「自然の摂理」と「社会性」を無視した、極めて『思想性・社会性の薄弱・希薄な施策』だと思います。

『老いを生きる』人は、『願望と現実』との間で揺れ動く『心身の葛藤』を後輩たちに委ね、「死後にも関係性」が続いて、彼らが創る思想の『礎』と成り、自らの『社会的使命』を果たすのです。『ピンピン・コロリ』で人生を終えて仕舞うと、『葛藤する姿』が後輩たちの心に映らず、残らず、社会的使命が果たせません。死後にも続くはずの「関係性」が其処で途切れ、「死は避けるべきもの」と受け取られて仕舞い、社会を構成して生きる為に最も重要な『思想と社会性』が伝わりません。老いて逝く人の『葛藤と死』に触れて後輩たちは「自らも葛藤」し、『死後にもその関係性』が心に残り、生きる力を育む『思想や宗教』を生み出します。『老いと死』は『命より大切なもの』を『命と引換』に伝える、人と社会にとって極めて『創造的』な営みです。

高齢者に対する『予防重視』の施策に呼応するかの如くに今、35才以降から40才代の『高齢妊娠者』に対して、ダウン症など遺伝子の染色体異常により生じる胎児の障害の有無を調べる、『出生前診断』の『勧奨』が行われています。そして障害が確定した妊婦の内94%が中絶をしている、と新聞紙上で『公表』されています。これは正に『障害児の出産予防対策』ではないのか？との疑問を覚えます。今や『世の光』は不要になったのだろうか？

老いて要介護や認知症になるのを避ける「介護予防」と、障害を持つ胎児の「出産予防」とは『表裏の関係』にあるのではないかと強く感じます。相模原の『津久井やまゆり園』で起きた殺傷事件から1年が過ぎて、事件の背景を探る記事が多く載りますが、「介護予防」と「健康寿命」を全面的に推進する『高齢者施策』の中に、障害者の『存在を否定』し、障害児の『出産を予防』する『主たる根拠』が潜んでいるように見え、『介護』が生み出す『相互に作用し合う関係性』を頭かたにして『要介護障害者の存在価値』を確立し、職業としての介護の『価値』を高め『評価』を上げたい、と心より願います。

老いて要介護になり認知症になる人も、生れながらに障害を持つ人も共に、世の光となる『社会の構成メンバー』として受け容れ、『一人の責任主体』として最期までその『社会生活』を支えたい、と切に願います。

せいりょう園 渋谷 哲

#### 【せいりょう園空き情報 平成29年12月11日現在】



- サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」  
19.07㎡：8室、20.33㎡：1室、24.67㎡：2室、25.80㎡：2室
- サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」  
33㎡：3室、35㎡：1室、39㎡：1室
- ケアハウス：空きなし（バス・トイレ・キッチン付24㎡）
- グループホーム：空きなし ●グループホームまどか：空きなし

【問合せ先】 せいりょう園 Tel(079)421-7156/(079)424-3433

## K氏の看取りについて

ヘルパーステーション 松尾 繁  
(介護福祉士)

Kさんは平成19年9月29日にケアハウスに入居され、平成29年9月29日に亡くなりました。私は今年の6月に特養からヘルパーへ異動になり、数カ月の間関わらせて頂きました。初めてお会いして挨拶をした時、大きく目を見開いて笑顔で私を迎えてくれました。最初は私を別の職員と勘違いして「お子さんは元気ですか」「奥さん綺麗ですね」と言われることがあり少し困りましたが、私が別の職員であることを何度か説明すると「加古川の松尾さん」と笑顔で話しかけて下さるようになりました。食事やトイレの介助をさせて頂くと、「いつもありがとうございます」「腰は大丈夫ですか」等、気遣いの言葉をよく頂きました。また、夏祭りのうちわを大事にされ、「汗かいてますね」と私を仰いで下さったり、夜に居室を訪れると、孫の手を持ったKさんが「遅くまでご苦労様です」と私の背中を搔いて下さることもありました。

夏の終わり頃、Kさんの状態が少しずつ落ちていき「しんどい」と言われ入浴を断られることが増えました。また食事量が減り、膝の痛みを訴えられ、酷い時には体位交換もままならず、職員二人で対応することもありました。しかしそんな辛い状態にもかかわらずいつも職員へ気遣いの言葉をかけて下さいました。

ある日、昼食を下膳しに居室を訪れると、Kさんは「どうやらお別れが近づいているようです」と言われました。その時のKさんは、特に悲しげな様子もなく、いつも通りの様子で私はただKさんの顔を見ることしかできませんでした。

それから時間が経つにつれてKさんは食事や水分も摂ることが難しくなってきました。亡くなる晩に私は夜勤を担当していました。夕方の時点で呼吸は苦しそうで、口腔内が乾いていたので、訪室時に様子を見ながら好物である甘酒で口腔ケアをしました。声をかけると、「加古川の松尾さん」としっかりと反応されました。「また来ます」と私が言うと、大きく頷いて下さいました。しかし次に私が訪室した時には、Kさんの呼吸は止まっていました。身体に触れるとほんのりとまだ温かく、今にも話しかけてくれそうな気がしました。しばらくして死亡確認の後、エンゼルケアが行われました。

明け方、ケアハウスの玄関のあたりで園長に出会い、Kさんが亡くなられたことを私は伝えました。それからしばらくして園長に再び会うと、「Kさん、穏やかな顔をしているね」と言われました。私はその言葉を聞いて、Kさんと関わらせて頂いたことに意味があったのだと、心の奥が温かくなるような気持ちになりました。

後日分かったことなのですが、Kさんが亡くなられる日に、親しくされていた他の入居者の方もKさんの居室を訪れられていたとのことでした。多くの人に見守られて亡くなられたのだと分かり、安堵の気持ちが芽生えました。

私はヘルパーステーションへ異動になり今回初めて看取りを経験しました。異動してからよく他の職員から「施設と在宅での介護の違い」について尋ねられます。確かに訪問時間やサービス等に違いは感じますが、明確な違いは何かというと答えることができません。しかし、施設であっても在宅であっても、利用者と真摯に向き合うことが大切であると、今回の看取りを機に改めて感じています。

## 研修報告

グループホーム介護主任 別府 克彦（介護福祉士）

9月9日、10日と日本認知症グループホーム大会の研修で京都まで行ってきました。

会場は国立京都国際会館で、京都議定書が採択されるなど、国際会議が開かれるような場所で研修がありました。介護保険制度や、グループホームの在り方、認知症についてなど、様々なテーマについて講義を受けました。その中で印象に残った講義について報告させていただきます。

認知症についてのシンポジウムの中で、若年性認知症の丹野智文さんが認知症の当事者代表としてご自身の話をして下さいました。丹野さんは現在42歳で仙台在住。ネットヨタで働きながら、「おれんじドア」という認知症についての相談窓口の実行委員代表もされています。私も、研修の直前にテレビ番組の中で、手帳のメモを頼りに仕事に行く丹野さんを観ました。

以下、丹野さんの話です。

客、スタッフの顔が分からなくなる。39歳の時に若年性アルツハイマー型認知症と診断された。この世の終わりと思い不安、恐怖で自然に涙が出た。

誰も当事者と気が付かない。見た目が普通なので色々と頼まれ、話しかけられるが上手く出来なくて嫌になる。それならばオープンにしようと思ったが、アルツハイマーには偏見があるのではないのか、家族に迷惑がかかるのではないのかと葛藤した。オープンにするとサポートを受けることは出来るが、偏見を気にしてオープンに出来なかった。実際には偏見は少なく、家族も理解してくれた。認知症は恥ずかしいことではなく、誰にでも起こりうる。

最初は関わってくれる方を介護職とみていたが、一緒に過ごすうちにパートナーと思うようになった。認知症の方は「何もできない」「何かしてあげないと」と思うかもしれないが、出来ることを奪わないで下さい。時間はかかるかもしれないが、一回失敗しても二回目、三回目。失敗しても出来るようになって自信がつく。認知症の進行を遅らせるような環境をつくってほしい。

声のかけ方にも気を付けてほしい。失敗したことを本人は分かっている。声のかけ方がキツイと、どうしてもなく怒りが込み上げてくる。認知症には受け入れる環境が大事。市役所や病院に相談に行くと、すぐに介護保険や薬の話になるが、そうではなく次に繋がる支援の話をしてほしい。

「おれんじドア」では、当事者（認知症）が当事者の支援を行っている。重度の方の家族と話をすると「この人は何も喋れません、出来ません」と言われることが多いが、私達が話をすると笑ってくれる。昔と同じようには出来ないかもしれないし、準備が必要かもしれないが「やれない」「出来ない」と言って、させない家族が多い。厚生労働省の会議に呼ばれることもある。そこでは「重度になるとどうしますか。どのように支えますか」という話ばかり。認知症には初期があって初期の関わりが大事。

介護職の方は「全てやってあげたい」と思われている方が多いが、当事者は一緒にしてもらえたほうが心地いい。そうすると対等で言いたいことが言える。色々な地域の認知症カフェに行くが、悪いカフェは相談所になっている。「どうしたの」「いつ認知症になったの」と尋問のよう。楽しく集まれるカフェは地域の認知症の方が楽しまれている。

認知症らしくないよねと言われるが、宮城県では自身のことを発信してくれる当事者が増えている。

と話されていました。「仕事を奪わないで」「介護職と対等でありたい」という意見には多

くの参加者が頷いていましたが、実際の介護現場ではなかなか実行されていません。「やってあげたい」という思いが強いのか、職員中心の関わりになっていることが多いです。聞くと簡単そうですが、とても難しいことです。

研修後、しばらく悩んだことがあります。「対等に接する」ということは「認知症として」は接しないのか。「認知症であっても一人の社会人」と思うが、「社会人と接する」ということと「認知症として接する」はイコールになるのか。

例えば、その方にしか見えない景色があり、私達からすれば明らかに間違っただ話をされる場合があります。そういう場合、介護職はその話や訴えを否定しません。時には、その世界観に寄り添うこともあります。しかしその接し方で、私たちが嘘を言っているような感覚になる時があります。これが対等ということなのでしょう。また、認知症の方が同じことを何度も言う時などに、職員はイライラし、言い合いになってしまうことがあります。私はほとんどそのような気持ちになりません。それが認知症だからと思うからです。しかし、それは私が冷たい人間だからではないのか、人と人は喧嘩するものではないのかとも思います。もう10年働いているので、なんとなく答えが見えそうではあるのですが、言葉にできないので上司に尋ねました。

人といっても子供もいれば、障害者、外国人、認知症の方もいる。性別や年齢も違うが、それぞれで接し方が違う。認知症として接することが社会人として接していないわけではない。認知症の方に嘘をつくのではなく、関係をスムーズにするために、良い関係を築くために演技をする。それは子供に対しても同じ。接する前から、認知症の方に対して否定しないと決めつけるのではなく、その時々で工夫していく。

すごく簡単なことでしたが、分かりやすく説明してもらいました。その工夫がこの仕事の楽しいところで、人と向き合うということ、対等に接するということだと思います。



## ～厨房だより～

管理栄養士 田村 愛弓

2017年もあと数日を残すのみとなりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。今年は12月に入ってから急激に冷え込み、お家で食べるお食事もお一気に冬メニューになったのではないのでしょうか。この度は寒い冬に旬を迎える「春菊」についてご紹介したいと思います。

春菊と聞くと、皆様はお鍋の脇役という認識ではないでしょうか。独特の香りが苦手でありあまり使わないという声も聞きますが、春菊はすばらしい食材でぜひ普段から食べていただきたい野菜なのです。春菊は昔から咳止めや風邪予防の漢方薬として、食材以外の用途でも使用されてきたお野菜です。実際の栄養としてはβ-カロテンが多く含まれ、ビタミン類も豊富なことで知られています。β-カロテンについては、同じ緑黄色野菜のかぼちゃやほうれん草を上回る量を含んでいます。この他にも様々な栄養素を含んでおり、お鍋の際には不足しがちな栄養素を補ってくれています。春菊はお鍋に入れる以外にも、和え物（胡麻和え、山葵醤油和え等）や天ぷらで食べてもおいしい食材です。



旬を迎えた春菊を食べて、寒い冬を乗り越えましょう。





師走に入り何となく気忙しいような雰囲気になってまいりました。仏教講話も今年最後となりました。締め括りは加古川町平野にある龍泉寺の副住職 酒見真暢様です。これまでに一度来て頂いておりますが、若くて、参加されている皆様の孫のような方です。結婚されて、1歳になるお子さんがいらっしゃると言っておられました。

前回同様、冒頭に南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏・・・と唱えられてご講話が始まりました。

「今日は縁という言葉についてお話します。これから忘年会シーズンですが、幹事さんがよく『ご縁を頂きまして』とか『ご縁を大切に』等と挨拶されたりしますね。電車に乗っていても、前に座った男の人と目が合っ、その方が体調不良になったり、隣の車両では気付きもしなかった出来事が起こったりと、これも縁ですね。不思議だなあと思います。また、こういう場を頂いて、話をさせて頂くのも縁なのだと思います。」ここで、宮本武蔵の事を描いた漫画家『井上雄彦さんが本の背表紙に書かれていた言葉を読んで下さいました。

縁とは実に味なものだ。人との縁、小説や漫画との縁。

1本の映画や1曲の歌との縁。自分が本当に心から求めたとき、

それらはまるで計ったように、そこにあったりする。

そういうものに、助けられている。

「井上さんは哲学的な事も描かれています。人と切り合い、人の命を奪う決闘とはいえ、自分と向き合った時にどういう感じがするか、背景を感じ取って考えている。小説や漫画、映画、一曲の歌等との出会いは不思議なもので、自分の心にフラッシュバックしてくる。縁というものは、気が付いたらそこにいてくれる。何気ない繋がりでも縁なのです。」

次に中学校の部活動の先生が卒業時に贈られた言葉を読まれました。

何も咲かない寒い日は 下へ下へと根を伸ばせ

いつか大きな花が咲く (作者不明)

「この言葉はマラソンの高橋尚子選手の座右の銘だそうです。スポーツ等では指導者がよくおっしゃっています。私は高校に行きたい所に行けなかった。そんな中でも、自分の心の中にひっかかりながらきた言葉です。高校の文集や友人の卒業の寄せ書きにも書いた文章です。友人との出会いがあり、あの高校生活があったからこそ今の私があります。今は大切です。

仏教では、偶然や奇跡・運命を説きません。キリスト教ではイエスの力で奇跡を起こされたと言われますが、仏教では原因があって、縁があって、結果がついてきます。どんな物でも因と縁と結果があります。いい結果があって受け止められます。」ここで高校時代の友人の話を読みました。友人のお母さんは、高校のセンター試験の前日に亡くなられた。さらに今年に入って、お父さんが亡くなられた。身内は無く、お父さ



んの妹と二人だけでお葬式をされました。お父さんは末期の大腸がんでした。お酒を飲み、がん検査等いっさいしていませんでした。

「友人はお父さんを見送り、後悔はありません。運命は変えられません。予測出来ません。結果が起こった時に、冷静に原因・縁を考えていく事は大事だと思います。因果応報と言います。もう一つ有縁無縁という言葉があります。縁がある事と縁が無い事。一般的には人と人との縁ですが、仏教では人と仏様の縁を言います。浄土宗の教えでは、仏様に縁がある人でも無い人でも救いとして下さる。日々生活していると、縁がある人を大切にするのは当然の事ですが、たまたま居合わせた人達との縁も大切にするという事は、きっとどこかで繋がっている事なのだと思います。良い事は勿論、悲しい事が起こっても、ご縁を頂いているのだと思い、心の中に落とし込んでいく事も大切だと思います。」と話されてご講話が終わりました。真暢様とお会いし、今日ここでお話を聞く機会を頂いたのもご縁です。

感謝の心で1年を終えたいと思います。ありがとうございました。

来年1月の仏教講話はお休みです。

(介護支援専門員：岡村 照代)

---

## RUN伴に参加して

ユニットリーダー 水井 竹織  
(介護福祉士)

私が住んでいた地域では近所の方が「あの人は認知症だから家から出さないで」「認知症の人は施設で鍵をかけて閉じ込めておいて欲しい」といった事がよく話されていました。認知症に対する偏見が続いている事が分かり、このままでは認知症の方の外出や買い物、趣味など、自由な生活や人としての権利が失われたまま人生を終えるのではないかと思うと、とても心苦しくなりました。上司にこのRUN伴へ参加のチャンスをもらい、自分のできることで少しでも認知症に興味をもってもらい、知ってもらえる機会になればとの思いでRUN伴に参加しました。

今年も加古川認知症家族の会（加古川元気会）と兵庫大学の学生と一緒にRUN伴を盛り上げてくれました。

演奏を聴きながらの焼き芋はとても好評でした。



---

## RUN伴（ランとも）とは…

今まで認知症の人と接点がなかった地域住民と、認知症の人や家族、医療福祉関係者が一緒にタスキをつなぎ、日本全国を縦断するイベントです。

認知症の人と出会うきっかけがなかったがために、認知症の人へのマイナスイメージを持ってしまいがちな地域の人々も喜びや達成感を共感することを通じて、認知症の人も地域で伴に暮らす大切な隣人であることを実感できます。

RUN伴は、そんなあらゆる人々の出会いの場をデザインし、顔の見えるつながりを各地で生んでいます。

## ロンドンアンサンブル

—四半世紀のご縁に感謝を込めて—

平成3年・1991年に、「美智子・リチャードご夫妻+木野雅之さん」3人編成の『ロンドンアンサンブルコンサート』を初めて開きました。

それから平成27年まで毎年、メンバーは少し変わりましたが、『ロンドンアンサンブルコンサート』は25回続きました。

そして28年の11月、美智子さんから直接電話があり、『癌で闘病中』である事を告げられました。その時の声は非常に元気そうで、私と妻・娘と、併せて『1時間以上』も話したように思います。そして、26回目のコンサートは休演です。そして今年4月に、木野さんから『美智子さんが亡くなった』と知らせて頂きました。

東京・世田谷の『生れた家の生れた部屋で幸せな想いに包まれて』、70才の誕生日の数日前に、イギリスから駆け付けたご主人とご兄弟に看取られたのでした。

25年の間には、冷や冷や・ドキドキ・ワクワクする思い出が沢山あります。『くも膜下出血の手術の後で、完全に復活された時はビックリしました。』

西明石で新幹線の網棚に置き忘れた『ストラディバリウス』のヴァイオリンを、美智子さんの機転の利いた行動で、すぐさま取り戻して、何事も無かったかの様に演奏できた年もありました。

『愛子様誕生』のお祝いと私の誕生日祝いを併せた『バースデイソング』のサプライズ演奏や、高校の合唱部に所属する『孫の一斗』に『独唱』の出番を創って頂いた事など、色々と思い出されます。

そして何より、『亡くなった』と聞いた後にも、『美智子さんがその辺にいらっしゃる様な気』がしています。『限りのある命』が、その『限りの後』にも、『永く生き続ける道が在る』事を、美智子さんが身をもって教えて下さっているように思います。『あのエネルギッシュな演奏する姿』を、美智子さんは、『世界中の人々の心の中に

残して来られたんだ』と改めて感心しています。1947年生まれの『同級生の吾身』を振り返って、『私もその様に生きたい』と今、心より願います。

『美智子さんが私たちの心の中で生き続ける』様に私も、『誰かの心の中で生き続ける事ができる様に生きたい』と『美智子さん』に誓います。

2017年12月1日

満70歳の日に感謝を込めて

渋谷 哲

—第18回ロンドンアンサンブルより—

